

引揚げ後の加藤松林人と理想の「朝鮮」像

房 旼娥（大阪大学）

加藤松林人（1898－1983）は、朝鮮半島が公的に大日本帝国の植民地となった 7 年後、1917 年に朝鮮半島に移住し、朝鮮美術展覧会（1922－1944）を中心に画業を重ねた。1930 年代半ばには「半島画壇の泰斗」と称され、植民地朝鮮画壇の中核人物となるが、敗戦により 1945 年 12 月に日本へ引揚げた。朝鮮半島を含め、旧帝国の植民地から引揚げた画家は、植民地での経歴を表に出すことを避ける傾向が強かったが、加藤松林人は、数多くの朝鮮半島にまつわる作品を制作するなど、引揚げ後も「朝鮮」とのつながりを維持し続けた。このような加藤松林人の独特な歩みは、喜多恵美子、李ユンヒらの研究者らによって再評価が行われつつある。しかし、これらの研究は加藤松林人の戦後作品の概要に言及するにとどまっており、個別の作品分析は十分に行われていない。また、作品制作の経緯についても、加藤を支援した人物や団体に関する記述にとどまっており、「朝鮮」関連作品の制作が戦後日本においても引き続き可能であった社会的な背景にまで及ぶ議論はまだ行われていない。

発表者は 2019 年より、喜多恵美子（大谷大学教授）の協力を得て、加藤の死後、徳島県阿南市に寄贈された 360 点の作品と、植民地朝鮮画壇や「朝鮮」画題などに関する手書き原稿（『回想の半島画壇』、『半島画趣』、『私のノート』）の調査を実施した。原稿用紙 795 枚に及ぶこの手稿については書き起こしを作成するとともに、『半島画趣』の一部は喜多恵美子と共同で校閲作業を行った。本発表では、この手稿を含む加藤による執筆資料を参照しつつ、阿南市所蔵品のうち山水風景画と風俗画に焦点をあて、引揚げ後の加藤松林人が再現した「朝鮮」について分析する。

その分析を通して発表者は、加藤の描いた「朝鮮」が、彼の実見した「朝鮮」をもとにしつつも、極めて主観的な視点で再構成されたものであったことを示す。それは、ノスタルジーを喚起する「朝鮮的なもの」からなる架空の理想郷であった。この理想的な「故郷」は、1950 年に勃発した朝鮮戦争によって荒廃し、南北に分断された現実とは乖離した、平和で美しく、かつ分断されていない「ひとつの朝鮮」を描き出している。それは、日韓の往来が容易ではなかった時代の在日コリアンらの望郷の情緒とも合致するものであった。本発表は、それらの作品が、植民史観から完全に自由ではなかった加藤自身の限界にも関わらず、在日コリアン・コミュニティを中心に、「朝鮮」の表象として機能していたことを明らかにする。さらに、加藤松林人が引揚げ後も「朝鮮の画家」という肩書を保持し続けたのは、在日コリアン・コミュニティの形成に加え、1965 年の日韓条約締結に向けた政府レベルの動きなどがあつた、戦後日本の時代背景の中でのみ可能であったことを浮き彫りにする。